

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和47年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001200

昭和 47 年度

国立国語研究所年報

—24—

国立国語研究所

1 9 7 3

刊行のことば

本書は、昭和47年度における研究および事業の経過について述べたものである。

47年度に刊行したものは次のとおりである。

社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)(報告47)

電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)(報告48)

電子計算機による国語研究(Ⅴ)(報告49)

幼児の文構造の発達(報告50)

国立国語研究所年報-23-(昭和46年度)

国語年鑑(昭和47年度)

昭和47年6月

国立国語研究所長

岩淵悦太郎

目 次

刊行のことは

昭和47年度の調査研究のあらまし	1
現代語の文法の研究—文体と文法との関係—	7
全国方言文法の対比研究	10
X線像による調音運動の研究	12
図形および文字の知覚および認識機構の研究	14
語彙論上の諸問題に関する調査・研究	15
日本語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—	16
現代児童・生徒の言語能力の動態調査	19
就学前児童の言語能力に関する全国調査	25
言語表現機能と伝達効果の研究	28
明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—	29
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	36
漱石・鷗外の用語の研究	39
社会構造と言語の関係についての基礎的研究	41
現代語の表記法に関する研究	
—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—	46
漢字機能度の研究	50
電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—	51
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	53
科学研究費補助金による研究	62
図書の収集と整理	65
庶務報告	66

昭和47年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係— | 話しことば研究室 |
| (2) 全国方言文法の対比研究 | 話しことば研究室 |
| (3) X線像による調音運動の研究 | 話しことば研究室 |
| (4) 図形および文字の知覚および認識機構の研究 | 話しことば研究室 |
| (5) 語彙論上の諸問題に関する調査・研究 | 書きことば研究室 |
| (6) 日本言語地図作成のための研究 | |
| —作図ならびに検証調査— | 地方言語研究室 |
| (7) 現代児童・生徒の言語能力の動態調査 | 国語教育研究室 |
| (8) 就学前児童の言語能力に関する全国調査 | 国語教育研究室 |
| (9) 言語の表現機能と伝達効果の研究 | 言語効果研究室 |
| (10) 明治時代語の研究 | |
| —明治初期における漢語の研究— | 近代語研究室 |
| (11) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 | 第一資料研究室 |
| (12) 漱石・鷗外の用語の研究 | 第一資料研究室 |
| (13) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 | 第二資料研究室 |
| (14) 現代語の表記法に関する研究 | |
| —新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究— | 第三資料研究室 |
| (15) 漢字機能度の研究 | 第三資料研究室 |
| (16) 電子計算機による語彙調査 | |
| —新聞を資料とする— | 言語計量調査室 |
| (17) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 | |

- (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係—……比喩表現をとりあげ、言語形式と比喩的転換の性格とを規準にして、实例にもとづく分類整理を

行なう。文学作品50編から採集した約3万の比喩表現例を、まず言語的な観点から検討して、3類に大別した。本年度は、その第1類の分析をすませて、数種の表・索引を作成するとともに、第2類の分析を進め、下位分類の方法を検討した。

- (2) 全国方言文法の対比研究……昭和41年度から3年間にわたって行なった全国方言の文法に関する調査の結果について整理を進める一方、44年度から、4か年計画で、史的価値の高い方言の録音とテキスト化を、各地の研究者の協力をえつつ進めている。同時に、それら方言の文法についての記述的な研究を行なっている。
- (3) X線像による調音運動の研究……前年度にひきつづき、日本語の種々の音声を発音する時の音声器官の運動を、X線映画フィルムによって分析した。また、この研究の成果を応用しつつ、わが国の聴覚障害児に対する発音指導、言語指導の改善に関する研究を促進することを目的として、これに関心のある音響学者、国語学者、聾教育の指導的な実践家など特殊教育関係者を招いてシンポジウムを行なった。
- (4) 図形および文字の知覚および認識機構の研究……本年度は7年計画の第1年次として、問題の把握に努め、主として文献上の調査を行なった。このほかに、読書時の眼球運動の測定法を検討した。
- (5) 語彙論上の諸問題に関する調査・研究……同義的な類義語について、どちらの語をふつう使うか、好むか、ある条件下でどちらをとるか、その理由は何か、などについて、質問調査を老人層と青年層を対象に、東京と大阪で実施し、整理・集計を行なった。
- (6) 日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—……『日本言語地図』第6集の編集のための作業・研究を行なった。別に、資料の意味づけのための検証調査を、四国地方で行なった。
- (7) 現代児童・生徒の言語能力の動態調査……児童・生徒が現代の社会的・文化的変化とのかかわりあいのなかで、どのような言語能力を獲得するか、その実態・特徴・問題点を明らかにすることを目的とした3か年の継続調

査である。本年度はその第2年次にあたり、前年度に実施した基礎調査のうえにたつて、中学3年生の文章表現力を対象とした調査（東京・新潟・奈良の3都県、計18校、約700名）および、同じく中学3年生についての表現行動の調査（東京2校、新潟2校、奈良2校、計6校各1クラスずつ）を行なった。また、調査の一環として、「中学校の作文指導の実態に関する質問紙調査」を東京（23区）・新潟・奈良の3都県の全公立中学校の国語科教員（各校1名ずつ）を対象として実施した。

- (8) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……現代の就学前児童の言語能力の発達の実態を明らかにするための諸調査のうち、昭和44年度に実施した語彙力調査の検証調査を行なうとともに、昨年度にひきつづき、文字の学習能力形成についての調査と実験を幼児並びに発達遅進児について行なった。
- (9) 言語の表現機能と伝達効果の研究……本年度も前年度にひきつづき、「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」を行ない、『幼児の文構造の発達—3歳～6歳児の場合—』（報告50）を刊行した。
- (10) 明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—……明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を明らかにするため、翻訳小説『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）とについて語彙表を作成し、両作品に現われた漢語の分析を進めた。また、ルビのない語の読み方を決定するため、同一訳者の『龍動新繁昌記』（明治11年）の用例カードを採集した。なお、参考資料として『安愚楽鍋』の索引を整備し、漢語研究に関する著書論文目録の作成、および、近代語資料の調査を行なった。
- (11) 電子計算機による言語処理の基礎的研究……用語検索のシステムを作成し、新聞語彙調査データをはじめ、各種の入力データについて、単語単位、文節単位、さらにはセンテンス単位の、多様な検索結果を得て、言語情報処理の基礎的な研究を行なうことを目指している。また、日本語データの性格を把握するため、文字連続の統計的調査や、語句の連接形態の研究を進めている。

- (12) 漱石・鷗外の用語の研究……電子計算機によって、漱石・鷗外の作品の索引を作成するとともに、その分析を行なうもので、現在、諸作品の、片仮名によるKWIC索引と、漢字テレタイプを使用した五十音順索引ならびに品詞別用列表を作成している。すでに、索引ファイル（磁気テープ）の完成したものは『三四郎』『高瀬舟』『寒山拾得』の三作品であり、作業中のものは、『雁』『坊ちゃん』『硝子戸の中』『行人』の四作品である。
- (13) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究……既に実施した面接調査およびアンケート調査の整理・集計をほぼ完了した。各種場面における言語使用の変容について分析を進めた。社会構造と方言語彙との関係をみるために親族語の全体についての臨地調査を2地点で行なったほか、方言集等より収集した資料の整理に着手した。性向語彙の若干について言語社会学的調査研究をした報告書『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)』（報告47）を刊行した。
- (14) 現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—……新聞語彙調査の漢字表記の実態を明らかにするため、漢字表記語台帳の作成を進めた。また、かな書き語についても、かな書きが一覧できる表の作成に取りかかった。
- (15) 漢字機能度の研究……3年計画の特別研究の最終年次である。国立国語研究所がこれまでに実施した婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種の語彙調査および現在進行中の新聞語彙調査の結果を、漢字を含むデータについて集大成し、漢字による造語の実態、および各語の使用頻度から見た各漢字の機能性の実態を明らかにする。今年度で、予定通り作業を完了した。
- (16) 電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—……長単位について、全資料の処理を終わり、『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)』（報告48）を刊行した。さらに、言語処理に関する論文集『電子計算機による国語研究(Ⅴ)』（報告49）を刊行した。
- (17) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年の通り新聞・雑

誌・単行本について調査し、『国語年鑑』の資料として整理した。

なお、上記の研究のほかに、文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行なった。

試験研究(1) 社会変化と言語生活の変容(代表 岩淵悦太郎)……昭和28年度に愛知県岡崎市で行なった敬語および敬語意識に関する調査と大体同じ調査を同じ岡崎市で行ない、この約20年間の社会変化に応じて言語生活がどのように変容したかの調査を行なった。調査時期は主なものは1972年11月下旬と1973年3月中旬とであった。

一般研究(B) 電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究(代表 岩淵悦太郎)……国語の古典作品について、最近、用語索引を作成する動きがさかんであり、すでに、百種を越す索引類が刊行されている。これらの成果を利用して、索引類の見出し語と出典情報を、電子計算機によって磁気テープに収め、将来は、大規模な、国語の総合語彙ファイルを作成したい。その基礎作業として、代表的な古典作品から着手し、第一次の総合語彙表磁気テープを作成する一方、まだ索引の作られていない作品について、原文を片かなで入力して、片かなによる文脈つき用語索引を作成する。3年間の継続を予定しており、後述のとおり、古典12種類の用語の入力紙テープを作成し、二つの作品の文脈つき用語索引を作成した。

本年度の研究組織は次の通りである。(昭和47年4月1日現在)

◇第一研究部 部長 野元 菊雄

話しことば研究室 上村 幸雄(室長) 中村 明 高田 正治
神部 尚武

書きことば研究室 西尾 寅弥(室長) 宮島 達夫

地方言語研究室 徳川 宗賢(室長) 本堂 寛 佐藤 亮一
高田 誠

◇第二研究部 部長 芦沢 節

国語教育研究室	村石 昭三（室長）	根本今朝男	天野 清
言語効果研究室	芦沢 節（室長）	高橋 太郎（外国出張中）	大久保 愛
◇第三研究部 部長	斎賀 秀夫		
近代研語究室	飛田 良文（室長）	梶原滉太郎	
◇第四研究部 部長	林 四郎		
第一資料研究室	田中 章夫（室長）		
	江川 清	中野 洋	靄岡 昭夫
第二資料研究室	飯豊 毅一（室長）	渡辺 友左	
第三資料研究室	土屋 信一（室長）	野村 雅昭	
言語計量調査室	石綿 敏雄（室長）	斎藤 秀紀	村木新次郎

現代語の文法の研究

——文体と文法との関係——

A 目 的

現代日本語の文法現象が、とくに文体の形成にどうかかわりあうか、という観点から、比喩表現をとりあげ、言語形式と比喩的転換の性格とを規準として、比喩技法の分類整理を実例によって行なう。

B 担 当 者

話しことは研究室の中村明が担当し、衛藤蓉子（47.8.31退職）がその研究作業の一部をたすけた。

C 本年度の作業

(1) 文学作品50編（作者名・作品名・選定規準などについては『年報21』を参照）から採集した約3万の比喩表現例を検討し、言語的な観点から、比喩システムを次の3類に大別した。

第1類（仮称〈指標比喩〉）：比喩の成立に関与している言語形式を抽出できる場合 ㊶孤独はどんどん肥った、まるで豚のように。（三島由紀夫「金閣寺」）

第2類（仮称〈結合比喩〉）：語句どうしの結合に慣用からのずれがあり、その組合せの対応に言語上の論理的な飛躍が感じられる場合 ㊶公子のために、吉祥寺の家風が面くらっている。（丹羽文雄「顔」）

第3類（仮称〈文脈比喩〉）：言語形式（表現形式があらわす言語的な意味）と意味（その形式がその場であらわしている個別的な意味）との対応に慣用からのいちじるしいずれのある場合 ㊶かじとりのぼくが下手だからといって、中でおまえがあばれだしたら、小舟はひっくりかえって全滅するだけなんだ。（島尾敏雄「死の棘」）

(2) 第1類の比喩表現例を次の手順で分析した。

① <比喩表現> から <比喩形式> をぬき出す。

①例 その何気なしにしている、それでいていかにも自然に若い女らしい手つきは、それがまるで私を愛撫でもし出したかのような、呼吸づまるほどセンシユアルな魅力を私に感じさせた。(堀辰雄「風立ちぬ」)

⇒まるで・でも・かのような

② <比喩形式> から <傾向環境> を捨象する。

②例⇒まるで・でも・ような

③ <実現形> を <基本形> に置き換える。

③例⇒まるで・でも・よう

④そのときに得られた型を <比喩パタン> とする。

④例 まるで+でも+よう

⑤ <比喩パタン> を構成する個々の要素を <比喩マーク> とする。

⑤例 まるで、でも、よう

[注1] 比喩パタンは1個以上の比喩マークの組合せであらわされる。

[注2] 比喩形式は比喩パタンの実現形に傾向環境をくわえたものである。

[注3] 指標比喩は比喩形式を抽出できる比喩表現である。

(3) 出典一覧表(用例採集に使用した文学作品を一覧できるように、巻名・箇所・総ページ数・作者名・作品名・略号を表形式にまとめたもの)を作成した。

(4) 比喩マーク分類一覧を次のように作成した。

①比喩マークを品詞その他の文法的性質によって類にわける。

②各類のなかを意味・機能によって種にわける。

③各種に属するマークを形式や意味・性質などの似ているものがグループをなすように配列する。

[注4] 語連続や組合せ・型などは、それに相当する他の言語形式におきかえて判断した。

(5) 比喩マーク索引(各比喩マークを五十音順に配列し、比喩マーク分類一

覧中の位置を表示したもの)を作成した。

- (6) 比喩パターン索引(各比喩パターンを五十音順に配列し、記号によつて比喩パターン分類一覧中の位置を表示したもの)を作成した。
- (7) 比喩形式索引(各比喩形式を五十音順に配列し、比喩パターンとの関係を記号・番号によつて表示したもの)を作成した。
- (8) 第2類の比喩表現例について、対応に慣用とのずれが感じられる語句の組合せを一次的に品詞面で分類し、それぞれの用例における比喩的転換を調べた。

D 今後の予定

- (1) 比喩マーク別出現状況一覧(各比喩マークの出現状況を、他のマークとの組合せ・順序という環境、および、実例の得られた作品数とその用例数によつてあらわしたもの)を作成する。
- (2) 比喩マーク種別出現状況一覧(比喩マークの各種の出現状況を、上と同様の観点から調べたもの)を作成する。
- (3) 比喩マーク類別出現状況一覧(比喩マークの類を単位として上と同様に整理したもの)を作成する。
- (4) 指標比喩分類一覧を次の手順で作成する。
 - ①比喩パターンを比喩マークの類・種とその組合せ・順序によつて分類する。
 - ②分類した比喩パターンを類・種のアルファベット順—番号順に配列する。
 - ③おのおのに該当する比喩形式を番号順に列挙する。
 - ④作品数と用例数とを表示し、各レベルでの小計および合計を付記する。
- (5) 第2類の比喩表現例の分析の継続として、対応にずれの感じられる語句の基本的な意味の範疇を考慮し、比喩的転換の性格を類別する。
- (6) 第3類の比喩表現例を形式と臨時的な意味との関係によつて分析し、その比喩的転換の性格を類別する。
- (7) 研究報告『比喩表現の分類』(仮題)を執筆する。

(中村)

全国方言文法の対比研究

A 目的・意義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力を得て、沖縄をふくむ全国の方言について、統一的な方法による調査を行なう。研究の重点を、方言の文法現象のうち、名詞、動詞、形容詞の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査を行なうことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料を得ることである。また、得られる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するために役立つはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年から行なってきた「各地方言の共通語との対照的研究」をひきつぐものである。

B 担当者

話しことは研究室の上村幸雄（室長）、高田正治、衛藤蓉子（47.8.31退職）の3名が担当した。今年度行なった諸方言の録音とテキスト化は、次のひとひとの協力によるものである。

高橋俊三（沖縄国際大学講師）、宮良安彦（沖縄県立八重山高等学校教諭）石垣繁（沖縄県立八重山農林高等学校教諭）、伊良皆京子（沖縄県立北部農林高等学校教諭）、本永清（沖縄県立宮古高等学校教諭）、砂川ヒロ子（沖縄県立名護高等学校教諭）、西江サラ・アン、岡村隆博（鹿児島県大島郡天城町天城中学校教諭）、春日正三（立正大学助教授）、田畑英勝（鹿児島県立大島高等学校教諭）、寺師忠夫（もと鹿児島県立大島実業高等学校長）、石崎公曹（鹿児島県名瀬市名瀬中学校教諭）、浅沼孝則（東京都八丈町末吉中学校教諭）、稲垣正幸（都留文科大学教授）、伊藤信夫（山形県最上郡大蔵小学校教

論), 後藤岩雄 (秋田県雄勝郡十文字町植田小学校教諭)

C 本年度の経過と今後の予定

本年度はつぎの仕事を行なった。

- (1) 41年度から43年度までの調査結果の整理
- (2) 補足のための調査

41年度から43年度までの調査を補足するために、奄美諸島において、文法の調査と録音資料の採集とを行なった。

- (3) 方言の録音とテキストの作成

話しことば研究室では、方言のほろびてゆくなかで、信頼できる、良質の研究資料を今後確保するために、これまでも、方言の録音とテキスト化(音声表記, 標準語訳, 注つき)とを行なってきたが(『年報20』P.8, 『年報21』P.15, 『年報22』P.9参照), 47年度は, 前記の人々の協力によって, 沖縄, 奄美, 八丈島, 本土の僻地の合計16地点において録音とテキスト化とを行なった。また, 45年度に録音, テキスト化をおえたもののうち, つぎの1点を方言録音資料シリーズの後編として印刷した。

(シリーズナンバー) (方言名) (編者)

15 沖縄県八重山鳩間島方言 加治工真市

録音とテキスト化の仕事は44年度から47年度までの4年間に, 各地の方言研究者の協力をえて合計50箇所以上の方言について行なった。対象とした方言は国語史的にみて価値の高い僻地(奄美, 八丈島など, また内陸部僻地)を主とする。また, その成果は順次, 方言録音資料シリーズとして印刷していく予定である。

(上 村)

X線像による調音運動の研究

A 目的・意義

標記の研究は、話しことば研究室が継続的に行ないたいと考えている日本語音声の研究の一部をなすものである。音声の研究は、現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴、指導法などを明らかにすることを目的として行なう。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、または、病的異常のある音声も対象とすることがありうる。

B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄（室長）と高田正治が担当した。

C 本年度の研究

本年度も、ひきつづきX線像による調音運動の研究をつづけ、標準語の個々の単音を発する際のX線映画フィルム像の計測とトレース作業とを行なった。なお、フレームごとの解析のために、計測点のXY座標値によるデジタルな表示を行なう映像解析装置一式をあらたに導入した。

また、この研究の成果にもとづいた応用的な研究として、聾児に対する発音指導、言語指導の方法の改善に関するシンポジウム（70ページ参照）を行なった。

D 今後の予定

48年度以後も、発音過程全般に関する研究の一部としてひきつづき分析を行なう。なお、新装置によるデータの再検討を行なうため、47年度中に予

定していた成果の刊行は48年度にくりのばすことにした。応用面としての聾
児の発音・言語指導に関する研究もひきつぎ行なう予定である。

(上 村)

図形および文字の知覚および認識機構の研究

A 目 的

図形および文字が、感覚伝送系での情報処理、および大脳における神経系の活動の結果として知覚あるいは認識される過程について、生理心理学、視覚心理学および視覚工学的立場から実験研究を行なう。

B 担 当 者

話しことは研究室の神部尚武が担当した。

C 本年度の経過と今後の予定

本年度は、7年計画の第1年次として、問題の把握に努め、主として文献上の調査を行なった。このほかに、読書時の眼球運動の測定法を検討するための実験を行なった。この実験の結果から、アイカメラ法よりも眼球電位法のほうが読書時の眼球運動の測定には適していることがわかった。第2年次には、眼球電位法により、眼球運動と文字および表記の関係についての実験を行なう予定である。このほかに、文字系列を刺激とした記憶実験を行なう予定である。いずれの実験においても被験者が文字の系列から意味をとりだす行為の解明に、役立つように、実験を実施していく予定である。

(神 部)

語彙論上の諸問題に関する調査・研究

A 目 的

前年度に、長期にわたった計画に一応のしめくくりをつけたので、次の大きい計画への過渡的な期間として、語彙に関する小調査を行ない、あわせて次の研究テーマについて考える。

具体的には、Cに記すような、類義語についての調査を行なった。

B 担 当 者

書きことば研究室の西尾寅称が担当し、高木翠がその作業を助けた。

C 本年度の作業

日本語には、和語・漢語・外来語にわたって、同義的な類義語が多く、現代の語彙に重層性をもたらしている。このような同義語について、ふつうどちらの語を使うか、どちらの語を好むか、ある与えられた条件においてどちらをとるか、その理由は何か、などについて質問紙調査を行なった。(問題語の一部分は『類義語の研究』(報告28)に収めた昭和38年の調査と同一のものを、約10年をへだてた変化をみようとした。)調査対象としてことしは老人層と青年層をとりあげ、東京と大阪において調べた。そしてその結果の整理・集計を行なった。

D 今後の予定

次年度は中年層について調査し、全体の結果を原稿にまとめる予定である。

(西 尾)

日本語地図作成のための研究

——作図ならびに検証調査——

A 目 的

現代日本語の方言的基盤を地理的に展望し、かつ、日本語の歴史を言語地理学的に考察するために、日本語地域全域を対象とする『日本語地図』全6集を作成する。

あわせて、『日本語地図』に盛られている資料の性格を明らかにするための、検証調査を行う。

B 担 当 者

地図作成については、第一研究部長の野元菊雄、地方言語研究室の徳川宗賢（室長）・本堂寛・佐藤亮一・高田誠が共同してあたり、白沢宏枝、山田千枝子（48.1.31退職）が協力した。また、非常勤職員W.A.グロータースほか、多くの人々の援助を受けた。

検証調査は、地方言語研究室の徳川、本堂、佐藤、高田が共同して実施し、資料整理については白沢ほか協力した。

C 本年度の研究

昨年度までの経過については、既刊の『日本語地図』および『年報7』以下を見られたい。

『日本語地図』そのものについては、第5集の編修を終わり（刊行は9月）、続いて、最終巻第6集の編集のための作業・研究にはいった。

検証調査については、3種の調査を行った。

第1は、愛媛県八幡浜市から宇和島市にかけての地域におけるアクセント調査である。日本語地図作成のための調査項目は、主として語であり、アクセントについては相互に関連するものは、多少あるにしても、わずかであ

った。この検証調査では、アクセントのように、地点ごとに各言語特徴が相互に緊密に結びついている——体系をなしているといってもいいかもしれない——ものについて、境界地帯の状況を見極めようとする。調査語は2拍名詞40を中心として、調査語を文頭に持つ短文を読ませる方法を取り、インフォーマントは各地点1名の中学生（男女）、調査地点は2市5町にまたがる112か所であった。なお、質問には、アクセント意識についての若干の項目が含まれている。

調査の特徴としては、各地点での短文読みを3回繰り返して各発話を全部資料とする、資料を音声学的に観察する、全資料を録音して聞きとり分析の客観性を保とうとする、などを挙げることができよう。まとめれば、従来の方言アクセント研究に認められたラング重視の傾向に対して、パロルの観点を強調した調査ということができるともいえるかもしれない。

なお、この調査については10月に準備調査を行い、48年2月に本調査を行った。

第2の調査は、46年度に行った熊本県八代市と人吉市とを結ぶ地域における〈言語の地域差と場面差の交錯〉に関する調査（46年度の調査については『年報23』参照）の、第2次調査の準備である。

46年度に行った第1次調査の質問項目は、主として日本言語地図作成のための調査で採り上げた語であったが、第2次調査では、文法関係、待遇表現関係の言語事実など新しい観点による項目の場合、同地域でどのような状況が見られるか、確かめようとする。

この準備調査は48年3月に実施し、室員の佐藤、高田の2名が参加した。

第3は、46年度の検証調査3（『年報23』参照）の延長である。日本言語地図作成のための調査の往復はがきによる確認を、全地点にまで拡大した。前年度の調査を補うものである。

D 今後の予定

『日本語地図』の作図・編修の作業は、第6集完結まで続ける。日本語地図作成のための調査に関して集められた資料や、日本語地図編修の過程でできあがった資料、たとえば全見出し語索引など、『日本語地図』6集に盛り込みえないものは、機会を得て整理・刊行したい。

検証調査は継続する。各検証調査の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

(徳 川)

現代児童・生徒の言語能力の動態調査

A 目 的

この研究は、児童・生徒が現代の社会的・文化的変化とのかかわりあいのなかで、どのような言語能力を獲得するか、その実態・特徴・問題点を明らかにすることを目的とした調査である。

B 担 当 者

国語教育研究室の村石昭三（室長）、根本今朝男が担当し、芦沢節（第二研究部長）が参画した。また、川又瑠璃子がこれを助けた。なお、非常勤職員岡本奎六（前期）の協力を得た。

C 本年度の作業

本年度は、3か年計画の第2年次にあたり、前年度に実施した基礎調査のうえにたつて、中学校3年生の文章表現力に関する調査（東京・新潟・奈良の3都県、計18校、約700名）、および、同じく中学校3年生の表現行動の調査（東京2校、新潟2校、奈良2校、計6校、各1クラスずつ）を行なった。また、この調査の一環として、「中学校の作文指導の実態に関する質問紙調査」を、東京（23区）・新潟・奈良の3都県の全公立中学校の国語科教員（各校1名ずつ）を対象に実施した。なお、回答者の選定は各学校長・国語科主任者の推薦によった。

I 文章表現力に関する調査

文章表現力の構造・実態を明らかにするために、「文章表現力テスト」を作成実施するとともに、一定の統制された条件下における課題作文を実施した。また、作文の評価法の開発を旨として、作文評価委員を委嘱し、委員会を設けて前記課題作文の一つ「旅行をするには海外旅行がよいか、国内旅行

がよいか。」について評価観点を定め、複数評価者による評価法の実験的研究を試みた。一方、国語総合学力検査・読書力検査・知能検査・文章表現のための言語能力を見るテスト・文章表現力テストの再テストなどを行なった。さらに、前記諸調査の結果との相関分析によって「文章表現力テスト」の妥当性・信頼性について検討した。

この調査に協力を得た学校（各校の国語科主任の方にはテスト実施者として協力を得た）、作文評価委員は次のとおりである。

協力学校、テスト実施協力者

東京都

板橋区立赤塚第一中学校（校長 鈴木武，国語科主任 新井輝光）
豊島区立千川中学校（校長 舟茂俊雄，国語科主任 柴田文夫）
大田区立田園調布中学校（校長 飯島孝夫，国語科主任 是恒英任）
中央区立中央第三中学校（校長 小沢武雄，国語科主任 田口朝子）
文京区立文京第五中学校（校長 宮内宏，国語科主任 野田和之）
葛飾区立堀切中学校（校長 野沢邦夫，国語科主任 福原 訓）
北区立岩淵中学校—予備テスト協力学校—（校長 進藤末治，国語科主任 大内武彦）

新潟県

新潟市立内野中学校（校長 野瀬吉栄，国語科主任 伊藤文男）
新潟市立松浜中学校（校長 石川春男，国語科主任 織田太彦）
新潟市立山の下中学校（校長 吉井吉夫，国語科主任 渡辺成雄）
岩船郡朝日村立館腰中学校（校長 服部信夫，国語科主任 北村静子）
北蒲原郡中条町立築地中学校（校長 波多野真，国語科主任 中山幸子）
三島郡和島村立北辰中学校（校長 遠山時衛，国語科主任 小島英）

奈良県

奈良市立春日中学校（校長 岸田富義，国語科主任 林 俊一）
奈良市立登美ヶ丘中学校（校長 植西耕一，国語科主任 富士森恭平）
奈良市立若草中学校（校長 広岡宇三郎，国語科主任 帷子黎子）

吉野郡吉野村立小川中学校（校長 山添満昌，国語科主任 西沢恵子）
宇陀郡曾爾村立曾爾中学校（校長 橋本大七，国語科主任 中野澄子）
山辺郡都祁村立都祁中学校（校長 辻内耕作，国語科主任 福井 弘）

作文評価委員

飯塚不二男 新潟県長岡市立東北中学校教諭
今本勝造 奈良県教育委員会指導主事
太田良夫 東京都世田谷区立富士中学校教諭
岡本奎六 成城大学教授
鎌田 斌 東京都江戸川区立松江第一中学校教諭
葛本公典 奈良県生駒郡班鳩町立班鳩中学校教諭
小竹省三 新潟県教育委員会指導主事
斎藤喜門 お茶の水女子大学附属中学校教諭
佐久間佳人 新潟県新潟市立寄居中学校教諭
西尾武雄 奈良教育大学附属中学校教諭
柳下昭夫 東京都教育委員会指導主事
吉村安夫 東京都北区立岩淵中学校教諭

II 表現行動の調査

この調査は、生徒の日常の文章表現行動の実態を明らかにすることを目的とした調査である。「文章表現力に関する調査」の協力校として依頼した18校のなかから各ブロック2校ずつ（東京 千川中学校・田園調布中学校，新潟 内野中学校・北辰中学校，奈良 登美ヶ丘中学校・都祁中学校）委嘱し，各校1クラスについて実施した。おもな調査内容は，特定生徒の文章表現行動記録の収集，当該クラスの年間の文字資料の収集，当該クラスの文章表現に関する指導記録の収集などである。この調査の一つとして，新潟市立内野中学校の3年生1クラスについて，文章による表現力と口頭による表現力との対応関係を見るための録音調査を実施した。

この調査の実施にあたって，つぎに示すとおり，各学校の当該クラスの担任者に文章表現行動の記録者として協力を得た。

東京都

成瀬武夫 大田区立田園調布中学校教諭

水谷秀夫 豊島区立千川中学校教諭

新潟県

加瀬幸男 三島郡和島村立北辰中学校教諭

小林ヒサ 新潟市立内野中学校教諭

奈良県

仙田孝子 奈良市立登美ヶ丘中学校教諭

水口寿一 山辺郡都祁村立都祁中学校教諭

III 中学校の作文指導の実態に関する質問紙調査

この調査は、中学校における作文指導の実態を明らかにし、指導の改善に資することを目的とした調査で、東京（23区）・新潟・奈良の3都県の全公立中学校の国語科教員（各校1名ずつ）を対象とし、主として昭和47年度における指導の事実を中心的内容とした選択肢主体の調査である。年間の指導の事実ができるだけ明らかになるように48年3月に実施した。また、I、IIの調査結果の考察に資するため、I、IIの調査の実施クラスの国語科担当者にも回答者として協力を得た。調査の内容にはつぎのような事項を含めた。発送部数は計387、回収率は約75%である。

I 学校の環境と国語科学習指導

- A 学校の地域環境
- B 全学級数
- C 国語科教員数
- D 47年度使用の国語科教科書
- E 47年度における国語科の受けもち時数
- F 国語科以外の受けもち時数
- G 校務分掌

II 作文指導の内容・方法

- A 年間の作文回数

- B 課題作文について
- C 自由作文について
- D 学校行事に関連した作文
- E 教科書の作文教材による指導
- F 作文のためのワーク・ブックなどの使用
- G 作文を書かせる場所
- H 文集について
- I 原稿用紙の使い方の指導
- J 取材に関する指導
- K 事前の指導
- L 制作中の指導
- M 事後の指導
- N 評価の仕方

III 特別に行なっている作文の学習指導

- A 個人として
- B 学校として
- C 地域として

IV 作文指導についての意見（自由記入）

- A 学年ごとの指導の重点について
- B 中学校の作文指導のあるべき姿について
- C 作文の各種コンクールについて
- D 作文指導の観点からの小学校への希望

なお、この調査の実施にあたって次の諸機関の協力を得た。

東京都教育委員会指導部（部長 班目文雄）

東京都中学校国語教育研究会（会長 折原岱介）

新潟県教育委員会（教育長 白井哲夫）

新潟県中学校教育研究会（会長 村山卓治）

奈良県教育委員会（教育長 池田武夫）

奈良県国語教育研究会（会長 西崎弥太郎）

D 今後の予定

来年度は、小学校6年生の文章表現力に関する調査を東京・新潟・奈良の3地域について、中学校の場合とほぼ同規模の調査を行なう予定である。なお、中学校に関しては、今年度の調査結果の整理・集計の作業を進めるとともに、補充調査を行なう予定である。

（根 本）

就学前児童の言語能力に関する全国調査

A 目 的

現代の就学前児童（4歳児クラス、5歳児クラス）の言語能力の発達の実態を明らかにするため、昭和42年度より昭和44年度にかけて、本調査を実施してきたが、本年度は昭和43、44年度に実施した語彙・文法・コミュニケーション能力調査の検証・補充調査を行なうとともに、言語の学習能力の形成についての実験的な研究を行なった。

B 担 当 者

国語教育研究室の村石昭三（室長）、天野清（47.9.14以後外国出張）が担当し、福田昭子（48.1.31退職）が作業を助けた。そして、調査・実験の実施において、1幼稚園、3保育園、1養護学校の協力を得た。

C これまでの作業

昭和42年度は就学前児童の文字力の調査、昭和43年度は就学前児童の語彙力調査、昭和44年度は就学前児童の語彙・文法・コミュニケーション能力調査を実施し、昭和45年度以後はそれらの検証・補充調査を行なうとともにデータの集計整理の作業をすすめてきた。そして、昭和46年度に就学前児童の文字力の調査結果を『幼児の読み書き能力』（報告45）という報告書にまとめた。

D 本年度の作業

1. 「就学前児童の語彙力調査」の検証調査

昭和44年度に実施した動詞テスト絵図（Ⅰ）（Ⅱ）を使用して、特定個人にすべてのテストを行なって、動詞の語彙力を調べる調査を実施した。

被調査児 5名

調査園 東京・明昭第二幼稚園 東京都葛飾区堀切1-41

2 言語の学習能力の形成についての実験的研究

昨年の仕事にひきつづき、文字の学習能力形成を主にして調査と実験を行なった。

(a) 幼児の音節分解機能とその基礎機能についての調査

被調査児 2歳～4歳児 約100名

調査園 北区立王子保育園 東京都北区王子3-7

東京・道灌山幼稚園 東京都荒川区西日暮里4-7-15

(b) 発達遅滞児の文字の学習の可能性についての調査と形成実験

被調査児 7歳～12歳 約50名

調査校 都立王子養護学校 東京都北区十条台1-8-41

このうち、まだかな文字を習得しておらず、また自然に習得できる学習能力をもっていないと思われる19名の児童を対象に、一定の訓練プログラムに基づいた文字の学習能力の形成実験を行なった。

(c) 幼児の読み書き能力における知覚機制の研究

下記の図形・文字45種を含む筆順検査カードにしたがって、各図形・文字を模写させ、幼児の筆順形成の基礎にあると考えられる知覚機制について考察した。

被調査児 3歳～6歳児 199名

調査園 北区立浮間保育園 東京都北区浮間4-31

北区立桐ヶ丘保育園 東京都北区桐ヶ丘1-17

東京・明昭第二幼稚園 東京都葛飾区堀切1-41

図形・文字(抄)

十 11 よう ナソ 九 入

(図形 16種) (ひらがな 9字) (かたかな 9字) (漢字 11字)

各図形・文字はいずれも2ストロークで構成されているものに限った。

なお、文法・コミュニケーション能力調査の補充調査は10月より実施予定であったが、担当の天野清が外国出張のために中止した。

D 今後の予定

昭和48年度に、幼児の文法、コミュニケーション能力調査、49年度に幼児の語彙力調査について再度、検証補充調査を行ない、報告書にまとめる予定である。

(村石)

言語の表現機能と伝達効果の研究

A 目 的

この研究は言語の表現機能や伝達効果を、言語そのものとの関連において、とらえようとしている。本年度は、「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」として、幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程で研究することを、前年度にひきつづいて目的としている。

B 担 当 者

前年度と同じく、大久保愛が担当し、鈴木美都代がこの作業を助けた。

C 本年度の作業

これまでの研究を原稿にまとめ、『幼児の文構造の発達 — 3歳～6歳児の場合一』（報告50）として刊行した。

D 今後の予定

単語の形態論的分析および連語論的分析を継続して行なうとともに、本年度のまとめのときにし残した研究を行なう予定である。

(大久保)

明治時代語の研究

－明治初期における漢語の研究－

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化にともない、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく表われている。そこで、明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担当者

飛田良文（室長）・梶原滉太郎が共同して作業にあたり、牧野正子がこれを助けた。

C これまでの経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行ない、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7～20、および『明治初期の新聞の用語』〈報告15〉参照）。昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の総索引を作成し、現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行なっている。

D 本年度の作業

明治初期の漢語研究のため、次の作業を行なった。

(1) 『花柳春話』の語彙表作成と漢語動詞の分析

- (2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』(明治11年)の用例カードの採集
- (3) 仮名垣魯文著『安愚楽鍋』(明治4年刊)の総索引の整備
- (4) 漢語研究のための著書・論文目録の作成
- (5) 近代語資料の調査

その結果は、次のとおりである。

- (1) 『花柳春話』の語彙表の作成と漢語動詞の分析

本年度は、語彙表作成の作業を継続し、ルビがない語の読み方を決めるため、参考資料として(2)の作業を行なった。

なお、漢語動詞(サ変動詞)について、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との文体の比較を試みたので、その結果を報告する。

『欧州奇事花柳春話』(漢文直訳体)と『通俗花柳春話』(和文体)の全編における漢語サ変動詞(和漢混種語動詞)について、その語構成の類型を比較すると、次のようになる。

〔和漢混種語動詞の類型〕	〔欧州奇事〕	〔通俗〕
(A) 漢語+す	○	○
漢語+す+和語動詞	○	○
漢語+なす	×	○
漢語+なす+和語動詞	×	○
漢語+いたす	×	○
(B) 和語+漢語+す	○	○
和語+漢語+す+和語動詞	○	○
(C) 漢語+和語+す	×	○
漢語+和語+なす	×	○
(D) 漢語+和語+漢語+和語+す	×	○

語幹にあたる前要素の部分が(A)「漢語」だけである場合は、後要素の和語動詞に、『欧州奇事花柳春話』は「す」と「す+和語動詞」の二種類があるのに対して、『通俗花柳春話』は「す」「す+和語動詞」「なす」「なす+和語動詞」「いたす」の五種類がある。前要素が(B)「和語+漢語」の場合は、

いずれも「す」「す+和語動詞」の二種類で文体によるちがいはない。(C) および(D)の「漢語+和語」、あるいは「漢語+和語+漢語+和語」の場合は、『通俗花柳春話』にのみ見られる。したがって、全体として、漢文直訳体の『欧州奇事花柳春話』は四種類、和文体の『通俗花柳春話』には十種類の類型がある。そして、前要素が「漢語+和語」の形式をとるものは、漢文直訳体に見えない。

次に後要素の動詞の部分と比較してみよう。

『欧州奇事花柳春話』の場合

(A) 漢語+和語動詞 異なり語数 語例

1 漢語+す 1 0 5 4 アイケイす(愛敬), アイゴす(愛護) など。

2 漢語+す+う 2 キしう(記・得), キっしう(喫・得)

3 漢語+す+さる 1 3 イチガイしさる(一咳・去), イッシウしさる(一蹴・去), サンポしさる(散歩・去)など。

4 漢語+す+あたう 1 キしあたう(記・興)

5 漢語+す+おわる 7 イチドクしおわる(一讀・了), キっしおわる(喫・終), ジュクシしおわる(熟視・了)など。

6 漢語+す+きたる 1 1 ショウじきたる(生・來), ショウしきたる(賞・來), センポしきたる(跣歩・來), ソカイしきたる(蘇回・來)など。

7 漢語+す+たまう 1 シジしたまう(指示・玉)

8 漢語+す+つくす 1 ワしつくす(話・盡)

(B) 和語+漢語+和語動詞

1 和語+漢語+す 1 あいオウず(相・應)

2 和語+漢語+す+おわる 1 あいイっしおわる(相・揖・了)

『通俗花柳春話』の場合

(A) 漢語+和語動詞

1 漢語+す	2 5 6	アイす(愛), アンゴウす(暗合)など。
2 漢語+す+う	1	サユウしう(左右・得)
3 漢語+す+あう	1	ヒョウしあう(評)
4 漢語+す+いる(居)	1	キョウじいる(興・居)
5 漢語+す+いる(入)	1	ショウじいる(請・入)
6 漢語+す+おく	2	メイじおく(命), ヨウイしおく(具備・置)
7 漢語+す+こむ	1	フウじこむ(封)
8 漢語+す+さる	1	ジしさる(辭・去)
9 漢語+す+だす	1	アンじだす(案・出)
10 漢語+す+はつ	1	コウじはつ(困・果)
11 漢語+す+みる	1	キョウじみる(興・觀)
12 漢語+す+たまう	1 6	ウンドウしたまう(運動), ガイしたまう(害・給), ケツしたまう(決)など。
13 漢語+す+はべり	6	カンじはべり(感・侍), コウじはべり(困・侍), サッシはべり(察・侍)など。
14 漢語+す+まいらす	3	ガイしまいらす(害・參), サイカイしまいらす(再會・參)ヒョウしまいらす(評)
15 漢語+す+わずらう	1	アンじわずらう(案・煩)
16 漢語+す+たてまつる	4	ガイしたてまつる(害・奉), ガしたてまつる(賀・奉), ギしたてまつる(擬・奉), シイしたてまつる(弒・

奉)

- | | | |
|-------------|-----|--------------------------------------|
| 17漢語+なす | 1 8 | イチレイなす(一禮), ウンドウなす(運動), ケソウなす(懸想)など。 |
| 18漢語+なす+たまう | 1 | ヤクソクなしたまう(約束) |
| 19漢語+なす+もうす | 1 | アンナイなしもうす(案内・做・申) |
| 20漢語+いたす | 1 | スイサンいたす(推参) |

(B) 和語+漢語+和語動詞

- | | | |
|---------------|---|------------------------------------|
| 1 和語+漢語+す | 9 | あいオウズ(相・應), あいタイす(相・對), うちアンズ(打・案) |
| 2 和語+漢語+す+おわる | 1 | あいイッしおわる(相・揖・了) |

(C) 漢語+和語+和語動詞

- | | | |
|------------|---|----------------------------------|
| 1 漢語+和語+す | 3 | シュツたつす(出立), トいきす(吐息), チンしごとす(賃業) |
| 2 漢語+和語+なす | 1 | シュツたつなす(出立) |

(D) 漢語+和語+漢語+和語+和語動詞

- | | | |
|-----------------|---|-----------------|
| 1 漢語+和語+漢語+和語+す | 1 | サン केづきす(産の氣・付) |
|-----------------|---|-----------------|

『通俗花柳春話』(和文体)の方には、「たまう」「はべり」「まいらす」「たてまつる」などの敬語動詞が現われるが、『欧州奇事花柳春話』(漢文直訳体)には、例外的に「たまう」が一例現われるだけである。また、「～シサル」「～シアタワズ」「～シオワル」「～シキタル」のような漢文直訳体に現われる表現は『欧州奇事花柳春話』にのみ見える。また、両方の文体に共通する形式においても、「漢語+和語動詞」の場合のように、後要素の「す+和語動詞」の部分は、『欧州奇事花柳春話』が7種類、『通俗花柳春話』が15種類で、和文体の方が、圧倒的に動詞の種類が多い。したがって、漢文直訳体と和文体とでは、和漢混種語動詞の語構成も、前要素の構成も、また後要素の和語動詞の種類とその性格においても、明らかな相違がある。

(2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』(明治11年刊)のカード採集
昨年に引続いてカードの採集を行ない、3編まで完了した。

(3) 仮名垣魯文著『安愚楽鍋』(明治4年)の総索引の整備

『安愚楽鍋』の索引は、昭和35年度に自立語の所在索引を作成し、昭和41年度に付属語の総索引を作成した。今年度は、自立語索引と付属語索引のくいちがいを調整し、品詞名を加え、漢字表記その他の注記を加え、総索引としての体裁を整えた。なお、この総索引は昭和48年度に刊行の予定である。

(4) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き、新しく気付いたものを補充した。

(5) 近代語資料の調査

本年度は、秋田大学付属図書館、秋田県立秋田図書館、米沢市立米沢図書館(興談館文庫、特に聖書関係)、岡山大学付属図書館(池田家文庫)、山口大学付属図書館(棲息堂文庫、特に自然科学関係)、山口県立山口図書館(明倫館旧蔵本)、山口県立文書館(大村益次郎旧蔵本)、山口県立萩図書館、萩市郷土博物館(明倫館旧蔵本)、山口県立萩高等学校図書室(明治期の教科書類)を調査した。

この調査に関しては、特に下記の諸氏の御尽力を得た。

秋田大学付属図書館(北條忠雄氏、井上章氏、佐々木久春氏、平野正太郎氏)

秋田県立秋田図書館(高橋彦一氏、佐々木周氏)

米沢市立米沢図書館(和田文益氏、酒井醇氏)

岡山大学付属図書館(赤羽学氏、大友信一氏、音川啓太郎氏、野田正一氏)

山口大学付属図書館(安田充氏、関一雄氏、蘆永秀夫氏)

山口県立山口図書館(升井卓弥氏、樹下明紀氏)

山口県立山口文書館(田村哲夫氏)

山口県立萩図書館(大中久氏)

萩市郷土博物館(田中誠氏、黒川純行氏、近藤隆彦氏)

E 今後の予定

来年度は本年度作業を継続し下記の作業を行なう予定である。

(1) 『欧州奇事花柳春話』ならびに『通俗花柳春話』の自立語索引の作成

と分析

- (2) 漢語に関する著書・論文目録の作成
- (3) 近代語資料の文献調査
- (4) 『安愚楽鍋』総索引の刊行

(飛 田)

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使って、日本語のデータを処理しようとする、ことばや文字を扱わせる上で、解決すべきさまざまな問題が生じてくる。たとえば、日本語の活用現象の処理や、漢字の処理などは、その例である。また、電子計算機の高速度性と大量処理の能力を利用して、日本語の諸性格を研究すると、従来の研究方法では、とらえられなかった研究課題が浮かびあがってくる。文字連続や音素連続の研究、語句の相互連続の研究、あるいは、用語の自動検索にもとづく語彙や文法、文体等の研究などは、その例であり、国語研究における電子計算機の利用価値は、今後、ますます、高まってくることが予想される。しかし、上記のような問題を解決したり、課題を研究したりするためには、多くの基礎的な調査と方法論の確立が、まず必要である。

この研究の当面の目的は、こうした問題を研究していくための、基礎的な研究資料を作成し、それに基づいて、日本語の電子計算機処理の基礎理論(アルゴリズム)を検討するところにある。したがって、その成果は、国語資料の機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報処理の進展にも役立つものとなろう。

B 担当者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫(室長)・中野洋・齋岡昭夫が担当し、言語計量調査室の石綿敏雄(室長)・斎藤秀紀・村木新次郎の協力のもとに進められた。また、両研究室の益子芳江・堀江久美子・桜井敏子・林実知代(48.2.16採用)が研究作業を助けた。

C これまでの研究経過

電子計算機の導入以来、大量語彙調査の調査方式の検討・調査システムの開発のほか、「言語単位の自動分割」「言語データの機械処理法」「構文解析の自動化」「文字の連続確率（エントロピー）」などの研究を行ない、その成果は、『電子計算機による国語研究』（報告31）並びに、『電子計算機による国語研究（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ）』（報告34・39・46）に公表してきた。また、その途中経過や中間結果は、部内報告『LDP』に随時発表している。

以上のほか、昭和43・44年度には、文部省の科学研究費補助金（試験研究）による「言語情報処理における漢字処理の実験的研究（研究代表者・林四郎）」として、「漢字一かな（ローマ字）の相互変換システム」の開発や、「漢字かなまじり文の文字のエントロピーの計算」などを続けてきた。

D 本年度の研究

前年度までの研究が、どちらかというところ、大量語彙調査のシステム開発の線にそって進められてきたのに対して、本年度からは、用語検索のシステムの開発と、それに基づく各種の研究に、中心が移されてきた。

まず、用語検索システムをめぐるのは、入力データの言語単位・付加情報（品詞・活用等の情報）の検討や入力データのチェック・システムの開発が進められた（担当・中野洋）ほか、活用形の自動処理法の研究（靄岡昭夫）などが行なわれ、検索処理の実験を試みる段階にいたった。また、検索結果の分析を試みたものには、「動詞句の検索と分析」（石綿敏雄）があり、さらに、自動抄録の可能性を検討したものとしては、「自動抄録処理におけるキー・ワードの性格」（田中章夫）などの研究が見られた。

前年にひきつづいて、エントロピーの調査は、「漢字かなまじり文の文字連続」（野村雅昭〈第三資料研究室〉）の研究、「現代日本語における音素連続の実態」（中野洋）の分析が、ともに、公表された。

以上のほか、新聞語彙調査の分析としては、「記事の種類別にみた用語の異同についての分析」（村木新次郎）などがあつた。

これらの調査研究は、いずれも、1972年中に公刊された『電子計算機によ

る国語研究(Ⅳ)・(Ⅴ)』(報告46・49)に発表されたほか経過報告・中間結果は、部内資料『LDP・10』に収められている。

E 今後の予定

用語検索システムの、前半に当たる索引ファイルの作成プログラムは、本年度で、ほぼ完成したが、後半部分の自動検索ルーチンは、プログラムの細部を検討中であり、完成すればかなり多様な検索が可能になる見通しである。現在のところ、単語単位の検索が中心であるが、今後、その精度と効率を向上させるとともに、さらに、文節単位、センテンス単位での検索が処理できるように、システムを改良していく予定である。また、検索結果を用いて、語句や文の構造についての研究を進めることも予定している。

(田 中)

漱石・鷗外の用語の研究

A 目的・意義

この研究は、前年度、「電子計算機による言語処理に関する基礎的研究」の一環として開発した「索引作成と用語検索の処理システム」を、実際に使用して、夏目漱石・森鷗外の作品の用語を分析するものである。しかし、当面は、索引ファイル（磁気テープ）の作成と、処理システムの改良が中心となる。

B 担当者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫（室長）・中野洋・靄岡昭夫が担当し、言語計量調査室の石綿敏雄（室長）・斎藤秀紀・村木新次郎の協力のもとに進められた。また、両研究室の益子芳江・堀江久美子・桜井敏子・林実知代（48.2.16採用）が、研究作業を助けた。

C これまでの研究経過

前年までに開発された、KWICシステムを使用して、漱石の『三四郎』鷗外の『高瀬舟』の二作品について、索引作成のオペレートを実施し、索引ファイル（磁気テープ）を作成した。さらに、『高瀬舟』については、全文かたかなのKWIC索引を、出力した。

これとは別に、漢字かなまじりの索引作成システムの作成を試み、前年度から、鷗外の『寒山拾得』の、プレエディット（単位切り・情報つけ）を実施し、漢字テレタイプによる入力を開始した。

D 本年度の研究

本年度は、すでに作成した、索引作成システムの改良を進めるとともに、

検索システムの開発に着手し、一応、単語単位の検索が可能な段階にまで達した。そのため、このシステムを使って、前年度末に、漢字テレタイプによる入力を開始した『寒山拾得』について、索引ファイルを作成するとともに、品詞別の用語検索を試みて、「五十音順索引」と、「品詞別用例表」を作成し、日立製作所の漢字プリンターにより、その出力実験を行なった。これに引続いて、鷗外の『雁』のプレエディット、漢テレのパンチを開始し、さらに、漱石の『坊ちゃん』の単位切りを実施した。

一方、KWICシステムによる処理は、漱石の『硝子戸の中』の入力とオペレータを完了し、同じく『行人』についての入力を開始した。

E 今後の予定

すでに作成済みの索引作成システムについては、今後も、その効率化と精度の向上をはかり、現在、作成中の検索システムについては、単語単位の検索だけでなく、文節単位、センテンス単位等、多様な検索が可能になるように、システムを改良していく予定である。それによって、用語分析のための多角的な資料を得ることが可能になり、将来に予定されている用語研究に資するところが大きいと考えられる。

一方、索引作成の業務は、来年度においては現在実施中の『硝子戸の中』と『行人』のKWIC索引のファイルが完成するとともに、『雁』の索引の漢字プリンター出力と、『坊ちゃん』の電子計算機処理が完了することを予定している。また、現在、実施を計画しているものは、『山椒大夫』『草枕』『渋江抽斎』の三作品である。

(田 中)

社会構造と言語の関係についての基礎的研究

A 目的・意義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法（の変動）と社会構造および社会生活（の変動）との関係を明らかにすることを目ざしている。

中心の調査地点としては福島県伊達郡保原町地区および福島市郊外の茂庭地区を選んだ。

B 担当者

飯豊毅一（室長、音韻・文法を中心に言語および言語使用の面）、渡辺友左（語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面）が担当し、角田令子が作業を助けた。

C これまでの経過

昭和40年度に始めたこの調査は、昭和46年度までに次のようなことを行なった。

- 1 言語および言語使用の調査
 - (1) 音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系の調査
 - (2) 録音資料による実態調査
 - (3) 言語使用の意識に関する調査（面接調査およびアンケート調査）
 - (4) 各種場面における言語使用の変容についての調査
- 2 社会構造と言語使用の関係についての調査

- (1) 社会構造の調査
- (2) 社会構造と語彙およびその用法の構造との関連の調査

D 本年度の作業

1 言語および言語使用の調査

1.1 言語使用の意識に関する調査

面接調査およびアンケート調査の整理・集計・分析を行なった。これは、保原地区と茂庭地区との地域差や年代別・性別等により言語使用に、どのような差があるかをみようとしたものである。項目ごとの整理・集計は、完了したが、項目間の相関についての分析は来年度に一部持ち越された。

1.2 各種場面における言語使用の変容についての調査

前年度までに各種場面の録音採集およびこれについての文字化・カード化を完了したので、本年度は整理と分析の作業を行なった。これは主として、次の9場面において、どのような言語使用の変容があるかをみようとしたものである。同一人（明治39年生の男性）K氏について

i 会議 ii 未知高校長との応接 iii 未知外来者との応接
iv 旧知高年者との談話（未知外来者同席） v 旧知年少者との談話
の5場面の言語使用を調査し、さらに次の4場面における言語使用についても比較を試みた。

- vi 高年層女性と未知外来者 vii 青年層男性と未知外来者
viii 青年層女性と未知外来者 ix 寿会（高年者）会合

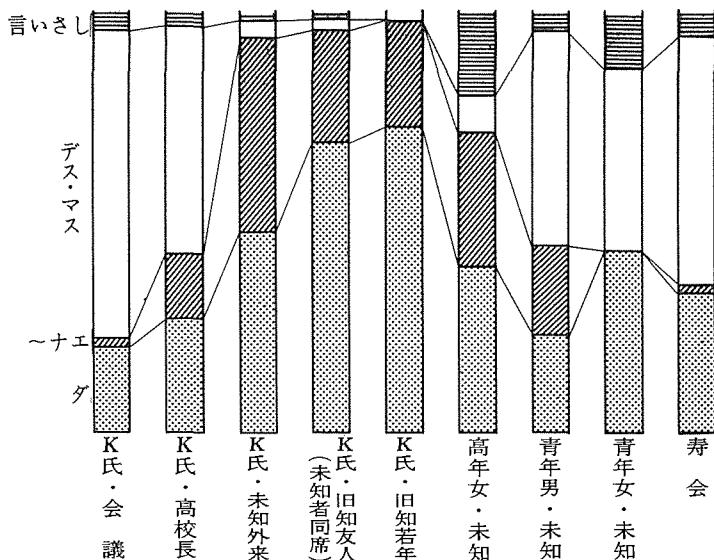
たとえば、文末部表現において、(1) ゴザイマス・デス・マス体を用いるか、(2) 方言文末助詞 ～ナエ・～ナン等による丁寧体を用いるか、(3) 用言の言い切りの形あるいは、～ダ体を用いるか、をこの9場面についてみると、次表のようになる。

これをグラフに示すと、44ページのようになる。これによれば、K氏においては最も改まった共通語形式は「会議」の場合に多用され、次いで「高校長との応接」・「未知外来者との応接」の順に少なくなる。普通の面接調査

で、言語使用の意識について調査すると、「未知外来者との応接」の場合に共通語を用いるという意識が最も強いのであるが、このK氏の実際の言語行動においては「未知外来者との応接」には、共通語式の デス・マス体は少なく、方言文末助詞による丁寧体あるいは ～ダ体が多用されている。さらに注目したいのは、「未知高校長との応接」の場合よりも共通語形式のデス

場面調査 文末部表現

	K					氏					青年女 未 知	青年男 未 知	青年女 未 知	寿会	
	会 議	高校長	未 知 (外来)	未 知 旧 知	旧 知 (若年)	高年女 未 知	青年男 未 知	青年女 未 知	寿会						
名・動・形(動)・副	17 14.9	9 8.9	12 6.9	30 17.1	24 17.5	29 13.1	12 6.1	35 16.6	32 26.0						
名・動・形(動)・副+文末助詞	4 3.5	11 10.9	38 22.0	53 30.3	20 14.6	32 14.5	14 7.1	42 19.9	2 1.6						
小 計	21 18.4	20 19.8	50 28.9	83 47.4	44 32.1	61 27.6	26 13.3	77 36.5	34 27.6						
名・動・形(動)・副+ダ	0	2 —	15 2.0	20 8.7	29 11.4	18 21.2	2 8.1	3 1.0	2 1.6						
名・動・形(動)・副+ダ+文末助詞	3 —	4 2.6	18 4.0	19 10.4	27 19.7	8 3.6	9 4.6	11 5.2	2 1.6						
小 計	3 2.6	6 5.9	33 19.1	39 22.3	56 40.9	26 11.8	11 5.6	14 6.6	4 3.3						
アー、ウー、ン	0	2 —	0	0	1 0.7	1 0.5	8 4.1	1 0.5	3 2.4						
計	24 21.1	28 27.7	83 48.0	122 69.7	101 73.7	88 39.8	45 23.0	92 43.6	41 33.3						
名・動・形(動)・副+ ^{ナエ} _{ナン} 類	1 0.9	5 5.0	47 27.2	26 14.9	8 5.8	27 12.2	26 13.3	0	0						
名・動・形(動)・副+(^タ) _{ナン} 類	0	0	33 19.1	21 12.0	12 8.8	23 10.4	11 5.6	0	2 1.6						
小 計	1 0.9	5 5.0	80 46.2	47 26.9	20 14.6	50 22.6	37 18.9	0	2 1.6						
ハー	1 0.9	11 10.9	2 1.2	0	1 0.7	22 10.0	5 2.6	0	1 0.8						
計	2 1.8	16 15.8	82 47.4	47 26.9	21 15.3	72 32.6	42 21.4	0	3 2.4						
テゴザイマス	19 16.7	0	0	0	0	0	0	0	0						
デス	17 14.9	40 39.6	3 1.7	3 1.7	0	16	80 40.8	65 30.8	48 39.0						
マス	47 41.2	14 13.9	4 2.3	1 0.6	0	4 1.8	8 4.1	10 4.7	27 22.0						
小 計	83 72.8	54 53.5	7 4.0	4 2.3	0	20 9.0	88 44.9	75 35.5	75 61.0						
ハエ	1 0.9	1 1.0	0	0	0	0	13(12) 6.6	19(15) 9.0	0						
計	84 73.7	55 54.5	7 4.0	4 2.3	0	20 9.0	101 51.5	94 44.5	75 61.0						
言いさし	4 3.5	2 2.0	1 0.6	2 1.1	15 10.9	41 18.6	8 4.1	25 11.8	4 3.3						
総 計	114 100	101 100	173 100	175 100	137 100	221 100	196 100	211 100	123 100						



・マス体の、はるかに少ないことである。この高校長はかなり方言を使用しているにもかかわらず、「未知外来者との応接」よりも改まったマス・マス体を多用している。これは、たぶん、高校長とは校長室（会議室をかねている）でひとりて応接したのに対し、この場合の未知外来者には、近所の親しい農家の茶の間で応接したという条件の違いを考えなければならないであろう。このような条件の違いが言語使用にも影響を及ぼすものと考えられる。少なくとも、一概に未知外来者と応接する場合にきわめて共通語化しているとはいえないことを示している。

2 社会構造と語彙およびその用法との関連について

2.1 親族組織の構造と親族語の意味用法との関連

これまでの調査の継続である。前年度にひきつづき、次の調査をした。

- ① 臨地調査——三重県鳥羽市・島根県松江市の方言の親族語彙の全体について臨地調査をした。
- ② 文献調査——前年度に各地の方言集・方言辞典の類から採集した親族

語のカード約1万4千枚を分類整理する作業に着手した。

2.2 性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造との関連

昭和44年度と45年度に実施したアンケート調査を集計整理し、その結果にもとづいて報告書『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)』（報告47）を刊行した。

（飯 豊）

現代語の表記法に関する研究

——新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究——

A 目的・意義

国語の正書法を確立するうえに役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

B 担当者

調査研究の担当者は、土屋信一（室長）・野村雅昭であり、宮田信子（旧姓小林）・武田道子が作業を助けた。

C これまでの経過

国語の文字表記についての諸問題を明らかにするために、これまで二つの方向から調査研究を進めてきた。一つは読み手および書き手を対象とした、表記行動に関する調査で、これについては「文字使用の実態調査」を取り上げ、送りがない表記に関する意識調査を行ない、その結果を『送りがない意識の調査』（報告40）として刊行した。

いま一つは、書かれた文字資料を対象とした、文字表記の調査研究で、これについては「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」を取り上げ、調査研究を進めてきた。これは、第一資料研究室と言語計量調査室が進めている電子計算機による新聞の語彙調査によって作成されたデータに、機械および人手による処理を施し、各種漢字表、語表記表を作成し、その分析・記述を行なうものである。

研究は漢字と表記の二面から進めている。漢字に関する研究では、これまでに全体の3分の1のデータ量に当たる「1紙1年分」の層別漢字表と、1紙朝刊前半分長単位用語例表とを作成し、前者をもとに、中間集計の結果を、『現代新聞の漢字調査（中間報告）』（資料集8）として刊行した。さらに全

データから、全体用語例台帳を作成し、漢字表記語台帳の作成に取りかかった。

表記の研究では、短単位語表記一覧表の作成を目ざし、長単位データおよび原文データを整え、同語異語判別作業のために出典台帳カードを作成した。また、漢字表記語台帳と対をなす、かな表記語台帳を作成するシステムの設計にも取りかかった。

また、これまでの分析の結果や調査の進め方について、『電子計算機による国語研究Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ』（報告34.39,46）『国研LDP』などに発表した。

D 本年度の作業

1 漢字に関する研究

(1) 漢字表記語台帳の作成

前年度に完成した、全体用語例台帳をもとに、漢字表記語台帳を作成するための作業を行なった。

全体用語例台帳とは、語彙調査で長単位とよばれる語のうち、漢字を表記要素として含むものを、第1字目の文字によって、五十音順に配列し、漢字テラタイプでアウトプットした作業台帳である。それをさらに短単位とよばれる単位に分割し、語種の判定、読みがなつけなどを行なったものを、五十音順に配列し、各語の層別の使用度数および表記の種類が一覧できるようにしたものが、漢字表記語台帳である。これによって、出現した語のうち、漢字を表記要素として含むものについては、その表記の実態を把握することができるようになり、さらに、別項2の作業によって、漢字を含まずに表記された語の状況を合わせることにより、新聞文章における各語の表記形式の全容をとらえることができる。また、各漢字の使用状況は、この台帳をもとにして、集計、分析をすることになる。

漢字表記語台帳は、本年度で、一部を残して、ほぼ作業を完了した。本年度に行なった作業の内容は、以下のとおりである。

(i) 作業台帳から語表記カード作成

- (ii) カードの五十音順配列（人名・地名と数詞は、別にして配列）
 - (iii) 同表記異語・異表記同語の判別
 - (iv) 各語の集計および代表カードの作成
 - (v) 代表カードの語表記台帳への転記
- (2) 新聞使用漢字の分析

漢字によって表記される言語単位が、新聞に出現した長単位語の中で、どのような順序で結合しているか、また、その結合形態にどのような型があるかということ調べるために、すでに作成した「朝日新聞朝刊前半漢字表」から、約1,500長単位語を抜き出し、分析を行なった。その結果については、下記の論文に述べたほか、48年2月に行なわれた、「現代の漢字・漢語」の研究発表会で、「現代漢語の語構造」というテーマでも発表した。

野村雅昭「複次結合語の構造」（『電子計算機による国語研究Ⅴ』〈報告49〉所収）

2 表記に関する研究

表記に関する研究は、主として語表記の研究に目標を置いている。そのためには、語表記が一覧できる表を作る必要がある。そこで、短単位語表記一覧表の作成と、長単位かな表記語一覧表の作成を進めた。

前者のためには、(1)原文に出典番号を付けたデータ・テープ、(2)長単位語に出典番号と出典情報を付けたデータ・テープ、(3)短単位語に長単位語を用例として付けたデータ・テープ、の3種が必要である。このうち、(1)(2)は整えることができたが、(3)は語彙調査の集計がまだそこまで達していないため、本年度は作成することができず、中断せざるを得なかった。

後者の長単位かな表記語一覧表の作成は、二方向から進めた。一つは、漢字の全体用語例台帳から、漢字を含むかな表記語を取り出して、調査単位を整え、同表記異語の判別をし、カード化する作業であり、いま一つは、語彙調査の簡易五十音順長単位語ファイルから、漢字を含まないかな表記語を取り出し、前者と同じようにカード化するものである。前者は本年度末までに終了したが、後者は、漢字を含まないかな表記語を取り出して磁気テープに

まとめ、その層別情報を整理し、配列を整えるところまでしか進めることができず、かな表記語用語例台帳の作成・印字はできなかった。

また、上記の作業と並行して、任意の長単位語を、出典番号・文脈付きで打ち出すK W I Cシステムを設計し、完成させた。これは、同表記異語の判別作業などに役立てるためである。

E 今後の予定

1 漢字に関する研究

漢字表記語台帳から、漢字1字を見出しとして、語例・用法・度数などを記入したカードをとり、漢字表を作成する。また、その一部を電子計算機に再入力し、各種度数表を作成する。さらに、それらをもとに、報告書刊行のための準備作業を開始する。

2 表記に関する研究

48年度は、電子計算機によってかな表記語用語例台帳の作成・印字をし、人手によって調査単位を整え、同表記異語の判別をし、カード化する作業を進める。さらに、すでに作成してある、漢字を含むかな表記語のカードと合わせて、かな表記語台帳を作成し、分析・記述に進む予定である。

(土 屋)

漢字機能度の研究

A 目的・意義

漢字一字一字が、現代語の中で、単語または造語要素としてどのように働いているかを、書きことば資料について大量に調べ、各文字の機能上の特徴を数量的に明らかにする。

B 担当者

第四研究部長林四郎と、第三資料研究室の土屋信一（室長）・野村雅昭が担当し、宮田信子（旧姓小林）が協力した。

C 本年度の作業

3年計画の第3年次に当たる。前年までに、婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種の語彙調査カードから、漢字表記を含む語について、漢字を見出しとする総合漢字用例表を作成したので、本年度は、この用例表に、現在進行中の新聞語彙調査の結果を記入する作業を行なった。本研究の作業は、これで完了した。

（ 林 ）

電子計算機による語彙調査

——新聞を資料とする——

A 目 的

現代語の語彙の実態調査を、カードによる人為作業から、電子計算機による機械処理に移して、データの処理量をふやし、語彙調査を、今日的課題の調査研究として実あらしめようとする。現代の新聞から、300万語の標本を取り、語彙の実態を明らかにする。

B 担 当 者

言語計量調査室の石綿敏雄（室長）・斎藤秀紀・村木新次郎および第一資料研究室の田中章夫（室長）・江川清・中野洋・靄岡昭夫がこれに当たり、両研究室の堀江久美子・小高京子・沢村都喜江・下山いくよ・桜井敏子・益子芳江が研究作業を助けた。

C これまでの経過

昭和41年1月から12月までの新聞3紙（朝日、毎日、読売）一年分を対象とする語彙調査である。調査の単位には、長単位と短単位の2種類を採用した。

昭和44年度に全体の三分之一に当たる量についての語彙表を刊行した。45年、46年にも、同じデータから作成した別種の語彙表を追加刊行した。

D 本年度の研究作業

1 長単位全体語彙表の刊行

長単位196万余全体の処理を終わり、これに含まれる、異なる21万余の長単位から、記号と数字を除いた19万余の長単位の表を刊行した。『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)』（報告48）がこれである。

2 短単位入力データの作成

長単位を短単位に分割して再入力するために、漢字テレタイプで見出し語をさん孔する作業を完了した。

3 短単位K W I Cの一部印字

片かなによるK W I C索引作成を、短単位延べ70万語分について、試みた。

E 今後の予定

電子計算機による新聞語彙調査の主要部を完了した。次年度は、短単位データを利用できる形に整える作業を行なう。

(石 綿)

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学界の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和47年1月から12月までに刊行された図書・雑誌・新聞について、その期間内に発表された文献の調査を行なった。これら文献の目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和48年版）に掲載されている。

以下、文献を内容によって分類したうえ、冊数または点数を示し、大まかな傾向を知る手がかりとする。（ ）内に前年の数を示し、今年との状況と比較できるようにした。

なお、外国発行の刊行図書・雑誌については、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

以上の調査および国語年鑑に関する作業は、次のものが担当した。

伊藤菊子 田原圭子 中曾根仁

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『納本週報』（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数745冊についての分類目録を作成した。

刊行書の分類と、その冊数

国語（学）		文字・表記	7（10）
国語一般	24（27）	語彙・用語	
国語史	31（39）	語彙・用語	10（12）
音声・音韻	6（9）	人名・地名	4（6）

文 法	9 (10)
文章・文体	2 (10)
方言・民俗	67 (47)
ことばと機械	4 (1)
コミュニケーション	
コミュニケーション一般 (言語生活)	21 (15)
言語技術 (話し方・書き方)	14 (35)
マス・コミュニケーション	8 (5)
国語国字問題	2 (3)
国語教育	
国語教育一般	5 (5)
学習指導	18 (17)
ことばの指導	0 (1)
語彙・文字教育	0 (4)
文法教育	0 (0)
聞く・話す	0 (0)
読む・読書指導	12 (5)
書く・作文指導	6 (4)
文学教育	0 (2)
古典教育	3 (0)
漢文教育	1 (0)
特殊教育	2 (3)
学力調査	6 (1)
国語教科書・その他	4 (6)
幼児の言語 (発達)	8 (12)
日本語の研究と教育	9 (5)

言語学その他	80 (56)
辞典・用語集	
国語辞典	7 (8)
用語辞典・用語集	32 (36)
特殊辞典	15 (25)
索引	19 (13)
資 料	
資料	48 (11)
史料	25 (11)
解題・目録	22 (19)
年鑑	11 (14)
	<u>計 542 (487) 冊</u>
追 補	
言語学その他	20 (27)
音声・音韻	0 (5)
文字・表記	2 (2)
語彙・文法	5 (15)
文章・文体	1 (0)
方言・民俗	38 (20)
ことばと機械	2 (0)
コミュニケーション	2 (3)
マスコミュニケーション	2 (9)
国語問題	0 (1)
国語教育	12 (11)
日本語の研究と教育	13 (8)
言語学その他	6 (18)
辞典・索引・資料	100 (41)
	<u>総計 745 (647) 冊</u>

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては、『雑誌記事索引』（国立国会図書館）の人文・社会編、『LLBA』（Language and Language Behavior Abstracts），その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，2,815点に達した。（連載物については，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。）

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数（目録類から採録した分は含まない。）

a 一般刊行雑誌（学会誌を含む）……351(345)種

国語・国文・言語ほか	124(118)	週刊誌・総合誌	1(1)
方言・民俗	14(12)	文芸・詩歌・芸能	5(6)
国語問題	5(5)	その他（教育・社会学・	
国語教育	27(32)	心理学ほか）	80(78)
マス・コミ関係	12(12)	臨時にはいった雑誌	21(24)
外国語	13(10)	外国誌	49(47)

b 大学・研究所等の紀要・報告類……253(221)種

2 論文・記事の分類とそと点数

国語(学)		音声・音韻	
国語(学)一般	219(189)	音声・音韻一般	29(28)
時評・随筆	63(56)	史的研究	35(21)
国語史		アクセント・	
国語史一般	34(33)	イントネーション	7(12)
訓点資料関係	5(10)	文字・表記	

文字・表記一般	1 (0)	東部	20 (34)
文字・字体	7 (19)	西部	19 (12)
表記	29 (33)	九州・沖縄	24 (28)
語彙・用語		民俗	13 (2)
語彙・用語一般	50 (65)	ことばと機械	
古語	41 (54)	言語情報処理	43 (38)
現代語	18 (9)	研究用機器	19 (4)
新語・流行語	2 (3)	コミュニケーション	
外来語	2 (8)	コミュニケーション一般	31 (14)
人名・地名 (命名)	18 (4)	言語生活	81 (42)
辞書・索引	34 (24)	言語活動	
文 法		言語活動一般	11 (51)
文法上の諸問題 (現代語法)		書く・読む	19 (28)
	44 (37)	話す・聞く	3 (4)
史的研究	32 (24)	マス・コミュニケーション	
敬語法	26 (6)	一般的問題	7 (2)
文章・文体		新聞	9 (0)
文章・表現一般	32 (28)	放送	50 (41)
史的研究	49 (73)	広告・宣伝	1 (4)
古典の注釈		印刷・出版	0 (0)
注釈一般	6 (2)	国語問題	
上古	16 (13)	国語問題一般	102 (67)
中古	9 (11)	(うち、音訓・送りがな改定	
中世	5 (4)	案に関する意見等	37 (14)
近世以降	12 (9)	表記法	20 (10)
方言・民俗		国語教育	
方言一般	19 (21)	国語教育一般	92 (71)
各地の方言		国語教育史	10 (5)

学習指導	44(197)	資料一般	7 (4)
ことばの教育一般	18 (16)	国語資料	17 (16)
文字・表記教育	42 (32)	翻刻	24 (24)
語彙教育	1 (3)	目録	6 (4)
文法教育	11 (8)	書評・紹介	
聞く・話す	2 (2)	国語(学) その他	18 (21)
読む・書く		音声・音韻	9 (2)
読む・書く一般	12 (20)	文字・表記	3 (2)
読解指導	50 (30)	語彙・用語	13 (1)
読書指導	46 (21)	文法	9 (3)
作文指導	60 (70)	文章・文体	2 (4)
文学教育	4 (17)	方言・民俗	3 (4)
古典教育	3 (1)	ことばと機械	3 (1)
漢文教育	19 (11)	コミュニケーション	6 (4)
特殊教育	24 (18)	マス・コミュニケーション	1 (0)
学力評価	7 (15)	国語問題	1 (0)
国語教科書・教材研究	50 (51)	国語教育	19 (16)
幼児の言語(発達)	20 (17)	日本語の研究と教育	2 (0)
日本語の研究と教育	74 (55)	言語(学) その他	32 (33)
言語(学)			<u>計 2,345(2,261) 点</u>
言語一般	171(133)	追 補	
意味	6 (9)	国語(学) その他	54 (17)
比較研究	14 (9)	国語史	15 (5)
翻訳の問題	20 (8)	音声・音韻	21 (12)
外国語研究	7 (19)	文字・表記	8 (9)
外国語教育(学習)	24 (96)	語彙・用語	38 (39)
各国の言語問題(教育)	23 (11)	文法	37 (13)
資 料		文章・文体	38 (18)

注釈	20 (14)	日本語の研究と教育	6 (24)
方言・民俗	29 (13)	言語(学)その他	95 (48)
ことばと機械	1 (5)	資料	14 (3)
コミュニケーション	8 (22)	書評・紹介	10 (2)
国語問題	8 (2)		
国語教育	68 (42)		
			<u>総計 2,815 (2,549) 点</u>

III 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は2,442点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		西日本	127(119)
朝日	299(284)	週刊・その他	
(大阪)*	(3)(2)	日本読書新聞	28(39)
毎日	324(313)	週刊読書人	48(50)
読売	464(357)	図書新聞	49(41)
(大阪)*	(2)(3)	新聞協会報	49(39)
東京	259(304)	教育学術新聞	14(14)
サンケイ	481(681)	その他	41(63)
日本経済	147(147)		
北海道	107(120)		
			<u>計 2,442 (2,578) 点</u>

* (大阪) は、各紙の大阪版であって、山田房一氏から、関係記事のあるごとに送られたものである。

2 月別の切り抜き点数

1月 220 (162)	2月 208 (217)	3月 211 (233)
4月 214 (213)	5月 278 (234)	6月 176 (210)
7月 214 (210)	8月 199 (200)	9月 173 (199)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	186(178)	言語活動一般	9 (18)
音声・音韻	28 (11)	話すこと (聞くこと)	38 (47)
文字		書くこと (読むこと)	20 (31)
文字・表記	24 (15)	読書	29 (43)
活字	6 (20)	ことばと機械	25 (37)
語彙		国語問題	
語彙一般	53(116)	国語問題一般	72 (23)
各種用語	42 (38)	表記の問題	
新語・流行語・隠語	35 (92)	表記一般	34 (35)
外国語・外来語	31 (50)	当用漢字など	45 (58)
辞書	46 (60)	かなづかい	10 (9)
問題語・命名	42(112)	送りがな	48 (1)
人名・地名	298(391)	かな書き	1 (7)
文法	6 (7)	横書き・縦書き	3 (3)
文体		人名・地名の表記	18 (17)
文体・表現	23 (62)	外来語表記	10 (9)
方言		ローマ字	2 (3)
方言一般	31 (36)	国語教育	
方言と標準語	5 (15)	国語教育一般	74 (45)
各地の方言	21 (15)	学習指導の問題	
言語生活		学習指導一般	8 (31)
言語生活一般	81 (66)	話す (聞く)	2 (5)
ことばの問題	54 (43)	読む (読書指導)	28 (30)
ことばづかひの問題	9 (25)	書く (作文指導)	6 (5)
敬語の問題	34 (18)	文学・古典教育	3 (2)
言語活動		特殊教育	22 (31)

視聴覚教育	10 (4)	日本語の研究と教育	113 (62)
学力テスト	6 (10)	マス・コミュニケーション	
幼児語教育	20 (32)	マス・コミ一般	38 (35)
言語学		新聞	17 (16)
言語一般	74 (56)	放送	44 (37)
外国語一般	38 (35)	宣伝・広告	104 (46)
比較研究	30 (24)	出版	50 (59)
翻訳の問題	70 (60)	書評・紹介ほか	162(133)
外国語教育	74 (88)		
外国語に関する紹介ほか	30 (19)		
		計	2,442 (2,578) 点

切り抜き点数は昨年よりも100点あまり少なかった（くわしくは『国語年鑑』〈48年版〉に掲載。）分類項目の中で、例年に比して、記事の多かったのは、「日本語の研究と教育」の項目だった。これは、日本ペンクラブ主催の「日本文化研究国際会議」が11月に京都で開かれ、海外の日本語研究者および日本語研究状況の紹介などの関係記事が各紙に掲載されたことによる。なお、会議では「日本語」の分科会があったのをはじめ、日本学研究発展のために、日本語教授法の確立が勧告されるなど、「日本語」が一つの焦点だったようだ。「広告・宣伝」の記事も多かった。これは、読売新聞の夕刊に、コマーシャルに関する記事が60回あまり連載されたことによる。また、国語審議会から、「当用漢字音訓表」と「改定送り仮名の付け方」が答申されたり、第11期の国語審議会委員が発表されるなど、国語問題関係の記事が多かった。各紙の投書欄に関係記事が目立っていた。

〔付〕 所外からの質問について

昭和47年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

計	月	47年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	48年	1月	2月	3月
	4月	4月									1月	2月	3月	
782	68	66	64	48	81	67	59	69	46	59	72	83		

質問の内容は、例年どおり多方面にわたっていた。用字用語について175件と件数が多いのも例年どおりであった（この中には、型・形、科目・課目、固い・硬い・堅いなど同音類義語の使い分けに関する質問49件を含んでいる。）漢字の読みかた116件（姓名に関して49件、施行〈せこう・しこう〉、発足〈はっそく・ほっそく〉のように両様の読みかたがあるものに関して17件などを含んでいる）、字体に関して（たとえば、淵・漕・漕、塚・塚）61件、かなづかい42件、送りがな40件、敬語の使いかた26件、当用漢字、および、国語政策に関して26件、文法上の問題21件などが件数の多かったものである。そのほか、研究所および研究所の刊行物についての照会が42件あった。電話の質問のほかには、はがき・封書による質問が23通、直接来所しての質問が9件ほどあった。

以上の質問件数は、すべて質問の係を通ったもので、所員が直接個人的に受けた質問は含んでいない。

（田原，中曾根）

科学研究費補助金による研究

社会変化と言語生活の変容（代表岩淵悦太郎）（試験研究（1））

〈研究目的〉

同じ題目による試験研究によって、前年度は、昭和25年度に国立国語研究所を主体として山形県鶴岡市で行なったものと同様の共通語化に関する調査を実施し、20年間に社会変化に伴って共通語化の状態がどのように進んだかを調べた。

今年度は第2年度として、この鶴岡市での調査の目的（年報23参照）を受けて、問題を敬語に移したものである。昭和28年度に国立国語研究所を主体に、敬語使用の実態および敬語使用に関する意識の調査を行なった愛知県岡崎市において、ほぼ同様の調査をして、両調査を比較することにより、社会変化に伴ってこれらがどのように変わってきたかを明らかにすることを目的とする。

また、この両年度の調査によって、共通語および敬語が社会の変化によりどのように変容を受け、どのような方向に向かいつつあるかを明らかにして共通語・敬語に対する方策およびこれらのための教育方法を樹立するのに直接有効な知識を得ることを最大の目的とする。この種の社会と言語生活の問題に関する継続調査・研究は今後いろいろな面について行なう必要があろう。今回の両年度の調査には、将来のそのような調査のための新しい研究方法の開発に役立つ内容をできるだけ取り入れ、そのための検討をもする。

〈実施の概要〉

本年度は上記の研究目的に応じて、次のような調査をした。実施の基本的な考え方は昨年度と同様である。

- 1 この20年間の地域社会の社会的変化を各種統計資料類を使って記述し、これと言語および言語生活の変容との関係を解明する一つの基礎資料を作る。
- 2 前回（28年）の被調査者の所在をつかむための聞き込み調査。

- 3 メイン・サーベイとして、ランダム・サンプリングにより約400人の市民を抽出（実際は男166人女236人計402人）しての調査。まず、社会生活・社会的態度を明らかにするための「社会生活調査票」を各人に郵送して記入を求め、次に調査員が訪問して、これを回収するとともに面接調査をする。面接調査では、言語生活、敬語使用、および敬語意識について調査した。実際の被調査者は399人（男166人女233人）であり、面接調査者は研究者11人によって、1972年11月20日から29日まで行なわれた。なお被調査者の男女比が大変女に傾いているようであるが、これは母集団における男女比を反映している。
- 4 前回の被調査者の追跡調査（パネル調査）。調査項目はすべて上記3と同じ。被調査者の合計は196人。調査時期は一部は上記3と同じであるが大部分は、1973年3月15日から21日までの間であり、研究者6人によって行なわれた。
- 5 前回は一般市民を対象としてスライド調査を行なったが、市民生活の都会化・複雑化により実施困難と判断し、それを補うものとして、市内の高校2校・中学校4校で、各2学年2クラスの生徒を対象として実施した。場面をスライドで与え、その場面における会話を録音器で聞かせて、それへの意見を答えさせるものである。被調査者は合計585人で、時期は上記3の調査と同じ。
- 6 対話の実験的調査。任意の市民に会話してもらって、その言語形式を分析して、敬語使用の条件などを探り出そうとするものである。12人の市民による7組の2人ずつの会話を録音し、それらの人々に対して、上の4の調査を実施した。調査時期は上記調査4と同じ。
- 7 以上の調査の結果得られた資料については、すべて電子計算機による集計作業が目下進められている。

なお、統計班として統計数理研究所、社会班として本研究所のほかに東京大学新聞研究所・東京都立大学、言語班として本研究所のほかに東京外国語大学の研究者が参加したほか、東京大学・名古屋大学の学生・大学院学生が

参加した。

電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）

（一般研究B）

〈研究目的〉

- 1 過去から現在に至る日本語の語誌がたどれるようにするための基礎作業として、代表的な古典作品における単語の使用度数を記載した総合語彙表の磁気テープ台帳を、電子計算機によって作成する。
- 2 上記の総合語彙表の資料にした古典作品のいくつかについて、文脈つき用語索引を電子計算機によって作成し、印字する。

〈実施の概要〉

- 1 万葉集・竹取物語・枕草子・源氏物語など既成の用語索引12種を収集し、語の単位を整えたのち、紙テープにパンチした。（人件費等の高騰から、全部をパンチすることはできなかった）また、これと並行して、「分類語彙表」の単語およびその意味番号を漢字テレタイプでパンチし、紙テープに収めた。これは、語を意味によって分類、検索するためである。
- 2 これまでに用語索引の作られていない『浮世風呂』『心中天網島』の二作品について、原文をかたかなで電子計算機に入力して、文脈つき用語索引を作成した。この二作品を選んだのは、これまで近世の言語資料の索引があまり作られていないためである。

図書収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和47年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図 書

受 入	1,878冊				
	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他	計
和 書	983	156	328	22	1,489
洋 書	252	36	101	0	389
計	1,235	192	429	22	1,878

逐次刊行物（学術雑誌、紀要、年報類）

継続受入	680種		
	購 入	寄 贈	計
和	54※	569	623
洋	34	23	57
計	88	592	680

※新聞（8種）を含む

（大 塚）

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所在	東京都北区西が丘3丁目9番14号	
敷地		10,030㎡
建物		
本館	鉄筋コンクリート二階建 (延)	1,576㎡
図書館	鉄筋コンクリート平屋建書庫積層 (延)	213㎡
電子計算機室	鉄筋コンクリート平屋建	118㎡
その他付属建物	(延)	570㎡
計		2,477㎡

2 経費

昭和47年度予算総額		215,614,000円
	人件費	134,607,000円
	事業費	80,199,000円
	各所修繕	808,000円
昭和47年度文部省科学研究費補助金総額		3,720,000円
	試験研究費 (1)	1,120,000円
	一般研究費 (B)	2,600,000円

II 評議員会 (昭和48年3月31日現在)

会長 久松 潜一 副会長 有光 次郎
(48.3.16就任)
阿部 吉雄 石井 庄司 石井 良助
江尻 進 遠藤 嘉基 尾高 邦雄

高津 春繁	佐伯 梅友	佐々木八郎
沢田 慶輔	千葉雄次郎	永井 健三
中村 光夫	西尾 実	西脇順三郎
前田 義徳	松方 三郎	山本 有三

III 組織と職員

1 定員 74名

2 組織および職員 (昭和48年3月31日現在)

	職 員	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩淵悦太郎	
庶務部	部 長	井上 繁	
庶務課	課 長	酒井 睦夫	
	課長補佐	国井 和朗	
		菊地 貞	
		岡本 まち	
		荒川佐代子	(旧姓根岸)
		田島 正幸	
会計課	課 長	根岸 達躬	47.6.1東京国立博物館に転出
	課 長	幸 文雄	47.6.1文化庁から転入
	課長補佐	山本 昌志	
		金田 とよ	
		中村 佐仲	
		加藤 雅子	
		南 弘一	
		岩田 茂男	
		鈴木 亨	
		安藤信太郎	
		木村 権治	

図 書 館			浅香 忠雄	
			大塚 通子	
			大浪由紀夫	
第一研究部	部	長	野元 菊雄	
話しことば研究室	室	長	上村 幸雄	
			中村 明	
			高田 正治	
			神部 尚武	47.4.1東芝総合研究所から採用
			衛藤 蓉子	47.8.31退職
書きことば研究室	室	長	西尾 寅弥	
			宮島 達夫	47.4.3~49.3.31外国出張(西ドイツ)
			高木 翠	
地方言語研究室	室	長	徳川 宗賢	
			本堂 寛	
			佐藤 亮一	
			高田 誠	47.826~47.9.5外国出張(イタリア)
			白沢 宏枝	
			山田千枝子	48.1.31退職
			W.A.グロ ータース	
第二研究部	部	長	芦沢 節	
国語教育研究室	室	長	村石 昭三	
			根本今朝男	
			天野 清	47.9.14~48.7.17外国出張(ソ連)
			川又瑠璃子	
			福田 昭子	48.1.31退職
			岡本 奎六	
			非常勤	
言語効果研究室	室	長	芦沢 節	45.9.1~48.4.1 事務代理
			高橋 太郎	47.9.1~48.3.31まで休職

			大久保 愛	
			鈴木美都代	
第三研究部	部	長	齋賀 秀夫	
近代語研究室	室	長	飛田 良文	
			松井 利彦	47.4.1京都教育大学へ転出
			梶原 滉太郎	
			牧野 正子	48.3.31退職
			田原 圭子	
			中曾根 仁	
			伊藤 菊子	
			中山 典子	47.4.1採用
第四研究部	部	長	林 四郎	48.3.27~49.3.31 言語計量調査室長事務代理
第一資料研究室	室	長	田中 章夫	
			江川 清	
			中野 洋	
			靄岡 昭夫	
			益子 芳江	48.3.31退職
			林 実知代	48.2.16採用
第二資料研究室	室	長	飯豊 毅一	
			渡辺 友左	
			角田 令子	47.4.1採用
第三資料研究室	室	長	土屋 信一	
			野村 雅昭	
			宮田 信子	(旧姓小林)
			武田 道子	
言語計量調査室	室	長	石綿 敏雄	48.3.27~49.3.31外国出張(フランス)
			齋藤 秀紀	
			村木新次郎	

堀江久美子
小高 京子
沢村都喜江
下山いくよ
岡田 敏子

(旧姓桜井)

IV 研究発表会・研究集会

1. 研究発表会「現代の漢字・漢語」(来会者約150名)

日時 昭和48年2月17日(土) 午後1時30分～4時30分

場所 岩波ホール

あいさつ	所長	岩淵悦太郎
現代漢語の源流	近代語研究室長	飛田 良文
現代漢語の語構造	第三資料研究室員	野村 雅昭
中学生と表外漢字	第二研究部長	芦沢 節
質疑応答 司会	第四研究部長	林 二郎

2. シンポジウム「聾児の言語指導の方法について」(出席者44名)

日時 昭和48年3月23日(金)～24日(土) 10:00～18:00

場所 国立国語研究所大会議室

第1日 座長 上村幸雄(国立国語研究所)

あいさつ 柴田貞雄(国立聴力言語障害センター)

講演 日本の聾教育の歴史的考察—とくに言語指導面について
相原益美(愛媛大学教育学部)

発表 聴覚障害幼児の言語指導〈発語指導について〉佐久間フクヨ
(福岡聾学校)

聴障幼児のことばの指導 大塚明敏(東京教育大学付属聾学
学校国府台分校)

聾学校における聴能訓練の現状と方向 安川宏(徳島聾学校)
発音指導の技術と補助サイン 菊地勝(松山聾学校)

第2日 座長 比企静雄（東北大学工学部電気通信研究所）

あいさつ 岩淵悦太郎（国立国語研究所長）

講演 実験音声学の現況 藤村靖（東京大学医学部音声言語医学研究施設）

発表 聾教育に用いられる電子装置について 鈴木久喜（東北大学電気通信研究所）

発声の安定化を目的とした訓練装置について 渡辺亮（熊本大学工学部）

討論 聴覚障害者の言語の学習・指導のためにどんな機械が必要で、また開発可能か 司会 上村幸雄 比企静雄

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

1 外国人研究員

氏名・職員	研究題目	研究期間
スタファン・ヤンソン ストックホルム大学生 (スウェーデン)	電子計算機による日本語文 型の研究	昭和46.10.1から 昭和48.9.30まで
ロルフ・リングレン ストックホルム大学生 (スウェーデン)	言語生活に関する研究	昭和47.8.28から 昭和48.1.5まで
ヴォルフラム・ミュレル・ヨコタ ルール大学教授 (西ドイツ)		昭和47年.8.10から 昭和47.9.30まで

2 内地留学生

氏名	勤務職名	研究題目	研究期間
春日正三	立正大学文学部 教授	日本語地方言語の 研究	昭和47.4.1から 昭和48.3.31まで
伊藤昭三	岐阜県岐阜市立本荘	個々の生徒が創造的に	昭和47.9.1から

中学校教諭 習得できる語句漢字 昭和47.11.30まで
の指導の研究

VI 日 記 抄

1972. 5. 18 昭和47年度文部省共済組合全国事務担当者打合せ会（科博）
26 文化庁附属機関庶務部課長会議（奈良国立文化財研究所）
6. 5 第79回国立国語研究所評議員会（国立国語研究所大会議室）
8 第31回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（私学会館）
" 文部省所轄研究所長会議（私学会館）
10 第24回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会
（国立教育会館）
6. 21 磁気テープ利用に関する打合せ会（国立国語研究所大会議室）
22 直研連共同問題研究会（学士会館）
7. 13 文化庁 清水次長来所
8. 7 イタリア・ミラノ大学教授サンドリ・ジャンカラ氏来訪
18 文化庁 文化部長・普及課長・国語課長・補佐来訪
10. 2 南アフリカ・ローズ大学ウィルアム・ブランフォード氏来訪
5 アメリカ・クワイーンズ大学教授 ジョセフ・レーベン氏来訪
18 昭和47年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議
19 同上第三部会（奈良国立文化財研究所）
26 昭和47年度（第23回）文部省所管研究所第3部会事務協議会
（博多）
11. 16～17 文部省所轄研究所長会議（遺伝研）
18 文部省所轄研究所長事務協議会（如水会館）
12. 4 第80回国立国語研究所評議員会（如水会館）
20 創立記念日 ポーランド・ワルシャワ大学教授コタンスキ氏来訪
1973. 2. 17 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
3. 9 各省直轄研究所長連絡協議会昭和47年度定例総会（農林年金）

- 16 第81回国立国語研究所評議員会（如水会館）
- 19 文化庁附属機関長会議（国立教育会館第2会議室）
- 23～24 聾児の言語指導方法に関するシンポジウム開催（国立国語研究所
大会議室）

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用法と実例——	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	600円
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	品切れ
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	200円
8	談 話 語 の 実 態	〃	品切れ
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	品切れ
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	1,000円

23	話しことばの文型 (2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	350円
25	現代雑誌九十種の用語用字 (3) ——分 析——	〃	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本語地図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本語地図 (2)	〃	〃
30-3	日本語地図 (3)	〃	〃
30-4	日本語地図 (4)	〃	8,000円
30-5	日本語地図 (5)	〃	9,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究 (II) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査 (II)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究 (III)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査 (III)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円

45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)	〃	600円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	〃	700円
50	幼児の文構造の発達	〃	1,000円

——3歳～6歳児の場合——

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙調査 <small>——現代新聞用語の一例——</small>	〃	品切れ
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	秀英出版刊	300円
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	品切れ
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	500円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	750円
3	ことばの研究 第3集	〃	800円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	8	昭和31年度	220円
2	昭和25年度	〃	9	昭和32年度	200円
3	昭和26年度	160円	10	昭和33年度	品切れ
4	昭和27年度	品切れ	11	昭和34年度	〃
5	昭和28年度	240円	12	昭和35年度	350円
6	昭和29年度	200円	13	昭和36年度	160円
7	昭和30年度	品切れ	14	昭和37年度	160円

15	昭和 38 年度	250円	20	昭和 43 年度	350円
16	昭和 39 年度	品切れ	21	昭和 44 年度	400円
17	昭和 40 年度	250円	22	昭和 45 年度	400円
18	昭和 41 年度	300円	23	昭和 46 年度	450円
19	昭和 42 年度	300円			

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 39 年版	980円
昭和 30 年版	〃	昭和 40 年版	1,100円
昭和 31 年版	〃	昭和 41 年版	1,100円
昭和 32 年版	〃	昭和 42 年版	1,100円
昭和 33 年版	〃	昭和 43 年版	品切れ
昭和 34 年版	〃	昭和 44 年版	1,500円
昭和 35 年版	550円	昭和 45 年版	1,500円
昭和 36 年版	800円	昭和 46 年版	2,000円
昭和 37 年版	品切れ	昭和 47 年版	2,200円
昭和 38 年版	〃	昭和 48 年版	2,700円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会	共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所	共著	金沢書店刊	品切れ

昭和48年8月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14
電話東京(900)3111(代表)

UDC 058 495.6
NDC 810.5

本書の市販品発行所
東京都新宿区市ヶ谷加賀町2の30(260)5281
株式会社 秀英出版

1972—1973

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1972 to March 1973

Study of Modern Japanese Grammar

Contrastive Study of Dialect Grammars

Cineradiographic Study of Articulatory Movements

Brain Mechanisms Underlying Visual Pattern Recognition

Study of Vocabulary (Synonyms)

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Dynamic Research on Language Abilities of Modern Elementary
School Children and Middle School Pupils

National Survey on Pre-School Children's Language Ability

Study on the Expressional Function and the Communication Effect
of Japanese

Study on the Language of the Meiji Period

Analytic Study of Language Data by Computer

Lexical Study on Works of Soseki and Ogai

Basic Study on the Relation between Language and Social
Structure

Study on the Writing System of Modern Japanese

Research on Chinese Characters in Modern Japanese

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO